航空環境研究 No.26（2022）, PP.50 − 51

追　悼

# 時田保夫先生の思い出*

山田　一郎**

本年5月9日未明、当機構（旧空港環境整備協会）理事並びに航空環境研究センター所長を務められた 時田 保夫 先生 が心不全のためお亡くなりになられました。享年97歳でした。心からお悔やみ申しあげるとともにご冥福をお祈りします。

時田先生は昭和63年に研究センター所長に就任され、平成13年まで13年間にわたり研究センターの運営に携わられました。ご在任中、航空局から委託された航空機騒音測定調査に参加したり、予測モデルの性能向上の委員会を主催したりされました。成田空港の飛行経路に関する委員会の委員長なども務められました。ご退任後は週1回ほどの割合で古巣である小林理学研究所（以下小林理研）に出向いて論文を読まれたり、外部からの相談に応じたりして、元気に過ごしておられました（小林理研で歓談されいる時田先生のお姿を写真1に示す）が、一昨年春からはコロナ禍でそれもままならず自宅で過ごしておられました。

写真１　小林理研にてご歓談中の時田先生、
テーブル上に筆談用の筆記具が置いてある
（落合博之氏提供：2019年６月７日撮影）

そのような状況の中、本年2月中旬に体調を崩して入院、治療を受け、さらに3月にリハビリが必要になって転院し、療養を開始されたそうです。小林理研ニュースの執筆記事に「研究所の創立85周年とともに百歳を迎え祝いたい気持ちでおります」と書かれ[1]、百寿を目指す心意気を示されていたのですが、ご訃報に接することとなりました。残念です。

時田先生が研究センターの所長になられたきっかけは、小林理研を定年で退任される頃に、航空公害防止協会（当機構の設立時の名称）の研究センターの所長（初代）を務められていた故守田栄先生から後任を引き受けて欲しいと依頼されたからでした。それは研究センターが羽田空港の旧Ｂ滑走路端付近の多摩川べりにあった頃のことですが、その当時は小林理研に勤めていた筆者が研究センターに行って時田先生とお会いすると何だか不思議な気がしたものです。実はさらに昔、筆者は大学卒業後に宇宙航空研究所の五十嵐・石井研究室の助手をしていたのですが、週に一度、研究センターに出向いてミニコンを動かし、研究員の皆さんと論文輪読をしたり、騒音測定に参加したりしていました。時田先生が研究センター所長に就任される少し前小林理研に移っていたのですが、それ以降も時々、研究センターに行っており、時田先生と羽田でお会いすることになったのです。さらに、その後、筆者は平成7年に小林理研の所長となり、平成13年に研究センター所長職を時田先生から引き継いだのですから、随

* Memories of the former Director Dr. Yasuo TOKITA by Ichiro YAMADA (Part-time director of Airport Facilitation and Environment Improvement Organization, and Technical adviser of RION Co., Ltd.).

** 空港振興・環境整備支援機構理事 リオン顧問

分長い間、先生のおそばで後を追いかけつつ仕事をさせていただいてきたことになります。

先生のお若い頃に遡ってご経歴を振り返りましょう。先生は北海道のご出身で、昭和16年12月に海軍兵学校に入校、その一週間後の真珠湾攻撃からアメリカとの戦争が始まって就業短縮となって昭和19年3月に兵学校を卒業、海軍で飛行機の操縦を学び（初めての航空との関わり）、海軍中尉となって特攻隊最前線基地まで行かれたそうですが、出動前に終戦となり、無事復員されました。余談ですが、音響学会で活躍した某大学教授が兵学校での時田先生の後輩と分かり、先生の前では常に恐縮していたので微笑ましく思ったものです。さて、戦後、時田先生は昭和21年に北海道大学に入り直し、卒業後に上京して就職されましたが、ご令兄が小林理研に在籍されていた関係で小林理研に繋がりができ、昭和25年に小林理研に転職をされました。縁とは不思議なものだと回顧しておられます[1)]。小林理研に入ると、同所開発の圧電セラミックスを使って加速度振動ピックアップを設計して製品化する仕事に携わられました。昭和20年代後半、音響学会が委託を受けて立川基地周辺の学校の騒音調査を行いました。それが時田先生が航空機騒音の問題に関与した最初の機会です。その時に音響学会の騒音部会長をされていたのが守田栄先生です。ちなみにその当時は教室内の騒音の大きさがどれくらいか何回かということで先生の話がどれ位聞き取りにくいか判定したそうです。

昭和30年代にはいると、公害が大きな社会問題として取り上げられることになり、騒音と振動の計測や対策の仕方の講義や指導のため、時田先生達は全国を駆けめぐられたそうです。さらに先生は、低周波音問題にも取り組まれ、圧電素子を使って低周波領域まで測定できるマイクロホンを開発し、ダムや高速道路周辺で測定し、建具のがたつきや圧迫感振動感の評価方法の確立にも尽力されました。環境庁の振動規制法の制定にも貢献しておられます。昭和55年には先生はデンマークのAalborg大学で開催された低周波音の国際会議に出席し、その時に見学した大学の研究室の実験室を参考にして、帰国後、小林理研の残響室群の一角に複数人が同時に実験参加できる低周波音実験室を作り心理・生理実験を行ってデータ集積に活用されました。その成果（いわゆる圧迫感・振動感の閾値特性）は現在でもしばしば活用されています。

時田先生は、昭和56年に小林理研の所長・常務理事に就任され、研究所運営にも携わられました。前述した通り、その前年に筆者が小林理研に入所、時田先生が航空局から依頼されて小林理研で行うことになった大阪空港の航空機騒音監視システムの設備更新の基本設計や実施設計等を担当しました。大仕事でしたが、今は懐かしく思い出されます。

時田先生は、いつからか記憶にありませんが、難聴になられ、リオンの補聴器を使っておられました。音響学の専門家である時田先生の装用経験のフィードバックはリオンの補聴器性能向上にも随分役立ったのではないでしょうか。しかし、晩年は補聴器を装用しても聴こえなくなって筆談を併用されるようになりましたが、それでも時折り小林理研で過ごすひとときを楽しみにされていました。この記事が航空環境研究に載る頃、小林理研ニュースも追悼記事を掲載するようです[2)]。時田先生の小林理研での様子も紹介されるようですので、機会があれば、ご一読されると良いのではないでしょうか。

参考文献

1) 時田保夫、小林理研との繋がり、小林理研ニュース、No.149, JUL. 2020.
2) 落合博明、時田先生を偲ぶ、小林理研ニュース、No.158 OCT. 2022.